
月夜の扉 頁の向こう

菜乃花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の扉 頁の向こう

【Nコード】

N4173M

【作者名】

菜乃花

【あらすじ】

一ノ瀬高校では、最近「図書室の幽霊」に関する噂が囁かれていた。友人に頼まれ、噂の真偽を確かめる事になった朝月^{あつき}は、夜の図書室に忍び込む。そこで朝月は、月明かりを頼りに本を読む一人の青年を見つけた。しばらくその様子を見てみると、いきなり青年の持つ本がまばゆい光を放ちあつという間に青年を飲み込んでしまう。無我夢中で光の中心に突っ込んだ朝月が次に目を覚ますと、そこは見知らぬ森の中だった……

ブログ（前書き）

このサイトに投稿する三作目です。今回は少しファンタジー要素を加えた物語となっております。スローペースの更新になると思いますが、感想等いただけると嬉しいです。

ブローグ

真夜中の図書室。

夜色に塗りつぶされた部屋の闇にまぎれて、静かに佇む一つの影があった。

厚い雲の隙間から覗いた月が、その人物の白い頬を幽鬼のように浮かび上がらせる。学校指定の学生服に身を包んだ彼は、青年というにはまだ顔立ちに幼さを残し、少年というには大人びた雰囲気放っていた。

彼が癖のない黒髪を無造作にかきあげると、均整のとれた繊細な顔立ちが露わになる。

不意に視線をあげると、彼はガラス越しに注ぐ月の光に目をすめた。

「まったく。満月が近くなると途端にこれか」

ため息混じりに呟いた彼の手には、一冊の古びた本があった。表紙は日に焼けて色が褪せ、所々に染みがついている。

彼がそれを月の光に翳すと、表紙に刻まれた文字が淡く発光し始めた。

「さて。今夜もいくか」

誰に聞かせるわけでもなくそう独りごちると、そっと本の頁を繰る。

刹那、部屋中に青白い光がはじけ、あっという間に彼の姿をのみ込んだ。尚もあふれ出る光によって、辺りが白い闇に塗りつぶされる。

暫くして、部屋を満たした光が再び本に収束したときには、図書室には誰の姿もなく、ただ静寂がその場を支配するだけだった。

第1夜 図書室の幽霊

「ねえ、聞いた？ 図書室に幽霊が出るんだって」

この噂が飛びかい始めたのは、今週に入ってすぐのことだった。

『図書室の幽霊』というのは、もともとはここ、一ノ瀬高校の七不思議のひとつだ。

噂の発信源も、突然『図書室の幽霊』が騒がれ始めた理由もわからないが、噂は爆発的に広がり、それは彼女、朝日朝月あさひなつきの耳にも入ることとなった。

「幽霊？ そんなの本当にいるわけないでしょ」

朝月は机に頬杖をついたまま、先ほど幽霊の噂を持ち込んだ親友、瀬尾美奈穂せおみなほを見上げた。

美奈穂は朝月の幼なじみだ。ふんわりとしたセミロングの髪は亜麻色で、大きな瞳は少し灰色がかっている。朝月よりも小柄で、思わず守ってあげたくなるような可愛い女の子だ。

姉御肌の朝月としては、おっとりとしていて、目をはなすと風に飛ばされてしまうのではと思うほどふわふわした雰囲気纏う美奈穂が心配でならない。なにかと危なっかしい美奈穂を見ているうちに、いつの間にか世話をやいてしまふのだった。

「でも……」

美奈穂はいい澱む。

「でも、この前の日曜日の夜遅くに、図書室が一瞬青白く光るのを見た人がいるんだって。そのとき、窓際に人影も見えたって……」

「あーはいはい。どうせ、どこかの目立ちたがりが作った嘘だって懸命に説明してもまったく取り合おうとしない朝月に、美奈穂は頬をふくらませて憤慨した。

「きつと嘘じゃないよ！」

いつもは決して声を荒げない美奈穂の大声に、朝月は思わず目を

丸くする。

「どうしたのよ、そんなにムキになって」

興奮のためか、美奈穂の瞳は心なしに潤んでいる様にも見える。

「だって……あたしも見たんだもん。昨日の夜、図書室が光に包まれたところを」

「……へ？」

驚き過ぎて、思わず返事が間抜けになる。

「見たって、美奈穂が？」

なんとか言葉をつなげた朝月にむけて、美奈穂は深々と頷いた。

「だからね、朝月ちゃん。私が見たモノは気のせいなのか、それとも本当に幽霊の仕業なのか、確かめてきてほしいの！」

予想外の展開に、今度こそ朝月は言葉を失った。

・
十・
十・

「ああもう……どうしてこうなるんだろっ……」

投げやりに呟くと、朝月は近くに人の気配がないことをを確認して、風雨で汚れたアルミサッシに手をかけた。

放課後に人目を盗んでこっそりと開けておいた鍵は、どうやら誰の目に留まることもなかったようで、窓はするすると開く。

履いてきたスニーカーを脱いで、難なく窓を乗り越えると、朝月は改めて周りを見回した。

辺りはもうすっかり夜の帳に包まれ、誰もいない校舎は不気味な程静まり返っている。

朝月は目の前に横たわる闇を一瞥すると、竦みそうになる足を叱咤して図書室を目指した。

「幽霊なんているわけないのに、確かめに行ったって無意味じゃない」

独りきりの不安から声にだした呟きが、思っていた以上に反響し

たために、逆に孤独を感じてしまった。無意識のうちに表情が険しくなる。

もうこんな頼みは聞いてやるものか、と思いながら、今朝の美奈穂との会話を思い出した。

これは昔から変わらないことだが、朝月がどんなに渋ろうとも、美奈穂にお願いだからと頼まれれば、結局断ることは出来ないのだ。美奈穂の瞳には、きっと人をいいなりにしてしまう魔力みたいなものがあるに違いない、と都合のいい想像をしているうちに、図書室の前にたどり着いていた。

「い、行くわよ」

自分に言い聞かせるように呟いて、図書室のドアに手をかける。音をたてないように慎重に横開きの扉を開けると、そっと足を踏み入れた。

図書室独特の、少し黴くさい臭いが鼻孔をくすぐる。

「何もいないわよね……」

確認するように呟いて首を巡らせると、視界の端で影が蠢いた。

「……っ」

まさかと思い、体を反転させると、癖のない髪を腰のあたりまで伸ばし、七分袖のＴシャツにジーンズというラフな格好をした人物が目の前に立っている。

よくよく目を凝らすと、パッチリした勝ち気な瞳と目があった。

自分はその目をよく知っている。何故ならそれは自身のものだからだ。

「……なんだ……鏡か」

先程の影は鏡に映った自分だったのだ。

「はああ……」

無意識のうちにとめていた息を吐き出すと、一気に緊張の糸が途切れた。座り込みそうになるのはなんとかこらえる。

「そつだよね。やっぱり幽霊なんているわけないじゃ……」

数瞬前の出来事で逆に強気になった朝月は、一歩足を踏み出そう

としたところで、再び身を強ばらせた。

「今……何か音しなかった？」

問いかけてみるものの、勿論応える声はない。

空耳かと思ったとき、かさり、と乾いた紙が擦れるような音が響いた。

「空耳じゃない。……奥からだ」

窓を閉めきつた図書室に風はないのだから、何かがいるのは間違いない。

恐怖心に勝る好奇心が、朝月の足を動かしていた。

図書室の奥へと進み、本棚の影から様子を窺う。それを何度か繰り返し、窓際の本棚の影から奥をのぞき込んだとき、淡い月光に照らされて、そこに彼はいた。

「……きれい」

無意識のうちに、言葉がこぼれていた。

月の光を頼りに、古びた本のページをめくる彼は、まるで一枚の絵画のように幻想的な雰囲気を纏っている。肩のあたりにかかる黒髪が夜の闇に溶け込んで、肌の白さを浮き立たせていた。

ふいに、彼が本から顔をあげた。朝月の存在に気がついたのかとも思ったが、どうやらそうでもないらしい。

つい、と視線を窓の外に向けると、開いたままの本を月の光に翳した。

「何をしてるんだろう……」

朝月がそう呟いた直後、夜の闇を光が切り裂いた。

「何よこれっ」

突然の出来事にパニック状態に陥る。と、白く塗りつぶされた視界の端で、彼が青白い光にのまれるのが見えた。

——待つて！！

声になったかどうかはわからない。

気がつくと、朝月は走り出していた。

（図書室の幽霊って、もしかしたらこの人かもしれない。うう

ん、こんなに綺麗なんだからそうに違いないわ)

頭のどこかでそんなことを考えながら、そのまま光の中心に突っ込む。

視界が暗転する直前、彼が目を見開くのを見た気がした。

第2夜 永い夜

目を開けると、そこは見たことのない森だった。

林立する広葉樹は皆背が高く、青々とした葉を茂らせている。枝葉の隙間から覗く空は濃紺で、満月に近い月が異様な存在感を持って光を放っていた。

「ここ……どこ？ あたし、さっきまで学校の図書室にいたんだよね……」

ゆるゆると上体を起こすと、朝月は自分に向かって確認するようにつぶやいた。しかしどう見てもここは図書室ではない。それどころか、学校の近辺とも思えなかった。

「誰かいらないの？」

きよるきよると辺りを見回すも、等しく夜の闇が広がっているだけで、人工的な明かりひとつ見あたらない。

いきなり訳のわからない状況に放り込まれて混乱していた朝月も、見知らぬ夜の森に一人きり、というあまりよろしくない環境に自分が置かれていることをだんだんと理解してきた。そして、冷静な思考能力が戻ってくるにつれて、不安や焦燥もより鮮明になってくる。とにかくこのままではまずい。いくら自分が体育会系だといっても、この状況は危険すぎる。

とりあえず人を探さなければ、と立ち上がろうとした刹那、背後からがさりという枝葉がこすれる音がした。

「誰か——むぐっ」

反射的に振り返ろうとしたものの、あっという間に距離を詰めた何者かに後ろから口をふさがれ、気がつけば身動きがとれなくなっていた。

「む……っつ」

体を擦って必死に抵抗を試みるも、朝月を押さえつける力は小揺

るぎもしない。

これは本当にまずいかもしれない、と朝月がよくわからない覚悟を決めたとき、ふいに耳元で声が響いた。

「静かにしろ。お前に危害を加えるつもりはない。お前が暴れたり大声をあげたりしないと約束するなら、すぐに離してやる」

そう囁く声は低く抑えられていたが、それは朝月が予想していたような下品なだみ声ではなく、小声でもよく通る年若い男のものだった。

これは朝月の勘でしかないのだが、その声に敵意のようなものは感じられない。それによく考えてみると、強い力で押さえられ身動きこそとれないものの、朝月の体に痛む箇所はひとつもなかった。もしかすると、加減をしてくれているのだろうか。

朝月が答えを出すのを待っているのか、それきり声は聞こえない。少なくとも相手に危害を加えるつもりはないと踏んだ朝月は、少しためらった後小さく頷いた。すると、予想以上にあっけなく体の拘束が解かれる。

口をふさいでいた手が外れ、大きく深呼吸をすると、夜の森の冷たい空気が胸を満たす。少し冷静さを取り戻した朝月は、次いで、いきなり後ろから羽交い締めにされるといっとう考えても非常識きわまりない行動に対する怒りが、腹の底からふつふつとわき上がったくるのを感じた。

よくよく考えると、朝月はこのような仕打ちを受けるような事など何一つしていないのだ。

（大声をあげたりしないとは約束したけど、こんな理不尽な扱いを受けて黙ってろって方が無理な話よ！ 文句のひとつでもつけてやるんだから！！）

そう意気込んで勢いよく振り返った朝月は、自分の後ろで膝立ちになっていた人物の顔を見た瞬間言葉を失った。

月の光を受け静かにそこに佇んでいたのは、図書室で見かけた幽霊その人だったのだ。

「幽霊でも見たような顔で人を見るな」

しばらくただ呆然と相手の顔を見つめていた朝月は、不機嫌に呟かれた言葉にようやく我に返った。

「あつ当たり前じゃない！ 実際に見てるんだから」

幽霊の存在に虚を突かれたものの、先ほどの怒りを思い出した朝月が険を含んだ調子で言い返すと、ものすごく怪訝そうな表情が返ってきた。

「……何を見ているって？」

「何をつて……だから、幽霊よ幽霊！ あなたでしょ、最近噂になつてる図書室の幽霊って」

苛々しながら答えると、今度は面食らったように黙り込まれてしまった。

幽霊に幽霊と言っただけなのに、どうしてこんなに驚かれなければならぬのか。

朝月が不思議に思っていると、図書室の幽霊は苦々しげに口を開いた。

「何を勘違いしたのかは知らないが、俺はお前と同じ人間だ」

無感情に淡々と告げられた言葉の意味を理解すると、朝月は思わず叫び声をあげそうになった。それでも叫ばずに済んだのは、再び口をふさがれてしまったからだ。

「大声はあげるな」

抑えた声に含まれる迫力に押し負け、朝月がコクコクと何度も頷くと、今度もあつさりと自由が戻ってきた。

「……本当に、幽霊じゃないの？」

「何度も言わせるな。お前が言うところの幽霊は、足があったり触れられたりするのか？」

おずおずと尋ねると、かなり鬱陶しそうにはあるが答えは返ってきた。無駄に偉そうな態度は氣にくわなかったが、言われてみればその通りだ。目の前の人物にはちゃんと足があるし、さっきから何度も触れている。よく考えると、ちゃんと体温もあったように思

う。

「えっと……ごめんなさい。あたしの勘違いだったみたい」

「別にいい」

怒られることを覚悟して謝ると、返ってきたのは朝月が予想していたような皮肉ではなかった。

思っていたほど嫌なやつではないのかもしれない。

「ほんとにごめんなさい。ちょっと混乱してて……」

「だから別にいい。……それに、噂の原因はおそらく俺だ。誰かに見られていたのだとしたら、それは俺の落ち度だ」

「落ち度……？」

まるで独り言のように呟かれたその言葉が気になって思わず問い返したものの、いつまで待っても返答はない。そもそも答えるつもりがないのか、彼はおもむろに立ち上がると遠くを見つめて何事かを考え始めた。

次第に重苦しい沈黙が辺りを支配し始め、居心地の悪さに耐えられなくなった朝月は自ら沈黙を破った。

「あたしは朝月。アサヒサツキっていうの。漢字は——」

「それ以上は言うな！」

「え……？」

突然の制止に朝月は目を丸くした。

「それ以上言う必要はない」

「必要ないってどういうことよ」

その問いに対する答えも返ってはこない。

（言いたい事だけ言って質問を無視したり、黙り込んだと思えば理不尽に命令したり、一体何なのよこいつ！ やっぱり嫌なやつかもしれない）

そういえば、いきなり羽交い締めにされた理由も聞いていない。

「ちよつとあんた！ えっと……」

今度こそ文句をつけてやろうと口を開いた朝月だったが、そこで相手の名前をまだ聞いていないことに思い当たった。

「名前は？」

短く問うと、彼はゆっくりと朝月を見下ろした。

氷の彫刻のように整った鋭利な美貌に目を奪われる。

彼には足があつて、触れることができて、温もりもある。それなのに、彼がこの世のものではないような、儚げで酷く危うい存在であるような気がした。

「あなたの名前を、教えてほしいの」

おそるおそる、その存在を確かめるように朝月が言葉を紡ぐと、梢を揺らすそよ風にも似た囁きが落とされた。

「永夜」
やじや

月光を背にする永夜の瞳に、朝月は悲しみの影を見たような気がした。

第3夜 本の中の世界

「あの……」

名前を端的に告げた後、永夜は再び遠くの景色に視線を固定してしまっていた。それでもなんとか会話を続けようと声をかけてはみたが、聞いているのかいないのか、その作り物めいた横顔からは何もわからない。

「トウヤ」

微かに呟かれた言葉を舌先で転がしてみる。「トウヤ」というのはやはり彼の名前だろう。ただそれだけでは情報が少ないように思う。

また冷たくあしらわれるかもしれないが、朝月は思い切って聞いてみることにした。

「あの！ トウヤさん」

また口を押さえられたくはないので、大きくなりすぎないように気をつけつつ言っと、永夜は視線だけを朝月に向けた。

「永夜でいい」

ぼそりと告げられた言葉からすると、やはり「トウヤ」というのは彼の名前らしい。

「えっと、じゃあトーヤ」

初対面でいきなり名前を呼び捨てるのは憚られたが、本人がそれでいいと言っているからいいのだろう。それに、他の呼び方をしようにも、朝月は永夜の名字を知らない。

「トーヤってどんな字を書くの？ 名字は？」

名前で呼ぶ事によって少し距離を縮めた気になっていた朝月だったが、問いかけを聞いてあからさまにしかめられた永夜の顔を見て、その希望的観測はあえなく潰えた。

「俺の名前は永夜だ。それ以上のことを知る必要はない」

とりつく島もないとはこのことだ。あまりに冷たい言いように、朝月は反論せずにはいらなかった。

「さつきから知る必要はないってそればかり。何が必要で何が必要じゃないかぐらいあたしが決めるわ」

なんとか叫ばないようにそう言つと、永夜は少しの沈黙の後に口を開いた。

「言い方を変えよう。ここでは名前のすべてを明かしてはいけない。だから言えないし、お前にも言うなと言つた」

「ここでは？ それってどういう……」

そこまで言つたところで、朝月は自分が今置かれている状況を思い出した。後から羽交い締めにされたり、永夜のことを幽霊と勘違いしたり、冷静さを欠く事ばかりが立て続けに起こつたせいですっかり忘れていたが、自分は今見知らぬ森の中にいるのだ。

幽霊の噂の真偽を確かめるために向かつた図書室で永夜を見つけ、彼の持つていた本が放つた光の中に飛び込んだところまではしっかりと覚えている。今ここに永夜がいるということは、彼がこの事態を起こした原因である可能性が高い。そうでなくても、さつきの発言からして何らかの情報を知っていることは確かだ。

「ねえ、教えて。ここはどこなの？ あたしたちさつきまで学校の図書室にいたのに、どうして森の中にいるの？」

「それは言えない」

「どうして？ それは、光の中に飛び込んだ私も悪かつたのかもしれないけど、まさかこんなことになるとは思わなかつたし。どう考えてもよくわからない何かに巻き込まれてるのに、何も知らないままなんていられないわ。私には知る権利があると思うの」

めげずに言いつのると、一瞬永夜の瞳に迷いの色が浮かんた。

永夜を切り崩すには今しかない。そう確信すると同時に、朝月は切り札を切つた。

「それでもまだ言えないって言うんなら、大声で叫んで暴れ回るわ！」

胸を張って言い切ると、永夜の眉間に深いしわが刻まれた。

やはりそうだ。永夜には朝月に騒がれては困る理由がある。だから二度も朝月の動きを止めた。

「どうするの？」

強気に問いかけると、永夜は盛大なため息をついた後に朝月の方に向き直った。

「わかった、話す。だがすべてを教える訳にはいかない」

「いいわ」

もとより全てを教えてもらえないことぐらいわかっている。だからすぐに返事をしたのだが、永夜にはそれが意外だったらしい。しばらく無言で朝月を見下ろした後、微かに微笑んだ。

「馬鹿つてわけじゃないんだな」

「なっ」

飛んできた皮肉を聞いて、朝月は不覚にも永夜に見とれていた自分をひどく後悔したのだった。

・
十・
十・

「確かここはどこかと聞いていたな」

朝月に向かい合う形で地面に腰を下ろした永夜は、少し迷うそぶりを見せた後、静かに話し始めた。

朝月が頷いたのを確認して、言葉を選びながら続ける。

「信じられないかもしれないが、ここは“本の中”だ」

「……………へ？」

予想を遙かに上回る告白に、朝月は思わず間抜けな声を漏らしていた。こんなに単純な言葉を理解するのに、ここまで時間がかかったのは生まれて初めてだ。

「“ホンのナカ”ってつまり、その……図書室にあるあの本の中のこと？」

混乱しながらも何とか言葉にすると、永夜は「ああ」と頷いた。

朝月としては冗談だと笑い飛ばしてもらいたかったのだが、永夜の表情を見る限り嘘を言っているとは思えない。かといって、はいそうですかと納得できる内容でもなかった。

「どこから見ていたかは知らないが、図書室で俺が読んでいた本はわかるか？」

「いきなり光り出した本のこと？」

「そうだ。今俺たちはその本の中にいる」

永夜が言っている事が真実だとすると、やはり永夜とあの光が原因だったのだ。

「実際にここは知らない森の中だし、トーヤが嘘を言ってるようにも見えないけど……でもやっぱり素直に信じられない」

思っていることを正直に告げる。

永夜もそう簡単に信じてもらえとは思っていなかったのだろう、機嫌を損ねた様子はなかった。

口元に手を当てて何事かを考えているようだったが、不意に顔を上げた。

「そうか……自分の目で見れば信じられるかもしれない」

誰に聞かせるでもなくそう呟くと、朝月に向かってこう言った。

「目を閉じる」

「目？ どうして」

「いいから閉じる。うまくいけば、ここが現実世界ではないと証明できる」

永夜の目的がわからず戸惑っていた朝月だったが、このままでは埒があかないのも確かだ。疑問は残るものの、おとなしく目を閉じた。

「それで、どうしたらいいの？」

「信じる」

「信じるって？」

「納得がいけないのはわかるが、ここは本の中だと信じるんだ。思い込むだけでもいい」

何を言い出すかと思えば、無理矢理納得しろというのか。これでは何の解決にもならない。

朝月が反論しようとする、永夜がそれを遮るように言葉を継いだ。

「いいから信じる。別に無理矢理納得させようとしている訳じゃない。ただ、ここが現実世界ではないという考えを頭ごなしに否定しないほしい」

出鼻をくじかれる形になった朝月だったが、そう言った永夜の声に誠実な響きを感じ取っていた。

「……わかった。柔軟になれってことよね？」

返事はなかったが、それは肯定ということだろう。

もしかするとここは本の中かもしれない。朝月はそう自分に言い聞かせた。

「もう目を開けてもいい」

そう言われ目を開けると、さっきと同じ位置に永夜が座っている。これのどこが証明になるのか。そう問いかけようとしたところでふと違和感を覚えた。

何かがおかしい。そう思い、もう一度永夜を注視したところで朝月は目を見開いた。

「えっ、どうしたのその格好!？」

「見えるようになったみたいだな」

事態を予想していたように落ち着いている永夜を見て、朝月は余計に混乱した。

本人は何ら変わっていないのに、その格好がさっきまで着ていた制服から一変していたのだ。

大量生産の見慣れた学生服が、タイを結んだ白いブラウスと燕尾服のような形状の艶のある濃紺のジャケットに変わり、白いズボンの裾は革のブーツの中に収まっている。少し長めの黒髪は、ジャケットと同色のリボンでひとつにまとめられていて、まるで物語に出てくる西欧の貴族のような風貌だった。

「いつの間に着替えたの？」

もし着替えたのだとしたら、とんでもない早業だ。ジャケットについている銀色の釦や数々の装飾品を見る限り、朝月が目を瞑っている間にどうにかなるようなものとは思えなかった。

「着替えたわけじゃない。俺は最初からこの格好だった」

朝月の混乱をよそに、永夜はさも当たり前のように言う。

「嘘よ！ だつてさっきまで制服だったじゃない」

「嘘じゃない。信じられないなら自分の格好を見てみる」

「あたしの？」

言われて自分の膝に視線を落とすと、そこには淡い水色の生地が広がっていた。

「何……これ」

慌てて自分が着ているものを確認すると、7分丈のTシャツにジーンズというラフな服装が、パフスリーブのついたハイウエストのワンピースに華奢なデザインのパンプスという自分とはおよそ縁のない格好になっていた。

おそろおそろ手を伸ばすと、滑らかな生地の上を指が滑った。触れるという事は、錯覚などではない。それに、この生地の量からすると――

「ドレス……？」

自分の口から漏れた呟きに愕然とする。何故ドレスなんて着ているんだろうか。朝月には着替えた覚えなどないのだ。

「だから言っただろう？ 俺もお前も着替えていない。最初からこの格好だった。ただ、お前がこの世界の事を正しく認識できていなかったただけだ」

永夜の言う通りだとすると、ここに来てから自分はずっとドレス姿だったことになる。だが、朝月にはただのTシャツとジーンズに見えていた。目を閉じる前と後に違いがあるとすれば、それはこの世界を本の中だと認めたかどうかだ。

そこまで考えて、朝月は気がついた。

「だから信じて言ったのね……」

「ああ。お前がこの世界の事を認めなくては、全てはお前の望むようにしか映らない。ここを現実世界だと思い込んでいたお前は、無意識のうちに俺の服を制服として見ようとしていたわけだ」

そしてこの世界を受け入れた朝月は、永夜の本物の姿を見ることがになった。

「信じる気になったか？」

あまりの衝撃に呆然としている朝月に、永夜はあくまで淡々と聞いた。

「そうね……信じがたいけど、ここまで現実的じゃないものを見ちゃうと、信じないわけにはいかないわね」

そう言っていると、朝月はまっすぐに永夜を見つめた。

「あなたを信じるわ。だから教えて、この世界の事を」

この瞬間、朝月の運命は大きく動き出した。

第4夜 図書修正士（ブックコレクター）

「まずは俺の話をしよう」

そう前置きすると、永夜は落ちていた木の枝を拾って地面に文字を書き始めた。

「図書修正士……？」

書き上げられた文字を読んでみたものの、耳慣れない言葉に朝月は首をひねる。

「図書修正士というのは、簡単に言うと職業の一種だ。ブックコレクターと呼ばれる事もある」

永夜は地面に書いた文字の上に“ブックコレクター”と書き足した。

「そして俺は図書修正士だ。お前が学生であるのと似たようなものだと思えばいい」

「じゃあ、トーヤの仕事がブックコレクター図書修正士ってやつなのね」

確認するように尋ねると、永夜は小さく頷いた。

思えば、言える限りの事を話すと約束してから、朝月がどんな些細な質問をしても、永夜は声を荒げたり嫌な顔をしたりしなくなつた。それどころか、朝月に理解できるように言葉を選んでくれる気さえする。約束を守っているのだと言ってしまえばそれまでだが、朝月は永夜のことを少し見直していた。

相変わらず口調は素っ気なかったが、それが彼の自然体なのだろう。

「あれ、でもそれが仕事ってことは、トーヤってうちの学校の生徒じゃないの？」

ふと気になって思ったままを口にすると、永夜はため息混じりに答えを返した。

「生徒だと言った覚えはない」

「確かに言っていないけど、制服着てたからてつきり生徒だと思つた」

「あれはただのカモフラージュだ。学校ではあの格好が一番目立たないだろう」

確かに制服を着ていれば大勢の生徒の中に紛れ込むのは簡単だ。

しかしそれは、あくまでも昼間の話である。夜の学校に忍び込むために制服を着る必要はないのではないか。

口には出さなかったが、もしかすると永夜には少し抜けたところがあるのかもしれない。

「話を続けるぞ」

そんな朝月の内心を読んだわけではないだろうが、永夜の声は朝月の思考を遮った。

・
十・
十・

本——人の手によって書かれたもの——は等しく「力」を持っている。その力が人に影響を及ぼすことはほとんどないが、時折本が強い力を持つときがあった。

本の力に「人の想い」が上乘せされた場合である。

強い想いを持って書かれたり読まれたりした本、あるいは多くの人の手に渡り様々な想いにさらされた本は、「人の想い」の力に影響されて強い力を宿す。より強い力を得た本は、次第に自身の内容を歪め、独自の物語を作り始める。本の中の世界——いわゆる仮想現実の世界のバランスが崩れ始めると、その影響が天災など様々な形をとって現実世界に現れてしまう。

そうなる前に、本の中の歪みを正し、物語があるべき形に戻す必要がある。その役目を担うのが、ブックコレクター図書修正士だつた。

ブックコレクター図書修正士は本の中——仮想現実に入る力を持っている。その力を使い、物語の登場人物の一人となることで、物語の歪みを内側から修正するのだ。

これは永夜についても例外ではなく、修正作業——修正士はこれを「コレクト」と呼ぶ——をするために本を開いたところに朝月が飛び込んできたため、誤って一緒に本の中に入ってしまった。これが、永夜の語った全てである。

「大丈夫か？」

永夜の言葉に、朝月は激しく首を振った。

「む……無理。初めて聞くことばかりで、頭の中がぐちゃぐちゃ」
「だらうな」

皮肉とも取れる言葉に言い返す余裕もない朝月は、大きくため息をつくと、涼しい顔をしている永夜に弱々しい視線を投げた。

「全てを理解する必要はない。ただここが本の中で、俺がここにいるのは仕事をするためだということだけわかっていればいい」

まあそれぐらいなら、と永夜に頷き返した朝月は、ふと思いついたことがあつて口を開いた。

「ねえトーヤ。ブックコレクター図書修正士には本の中に入る力があるのよね？」

「ああ」

「それなら、ここから出る力もあるの？」

永夜が頷くのを見て、朝月はお腹の底から息を吐き出した。

「よかったあ……」

ここが現実世界ではないと知って、もしかしたらもう元の世界には帰れないかもしれないと思っていた。だがそうではなかったのだ。朝月はいつの間にか強張っていた体から力が抜けるのを感じた。

「じゃあ、今すぐにでも帰れるの？」

期待を込めて永夜を見ると、永夜はあっさりと首をふった。

「それはできない」

あまりにあっさりと告げる永夜に、朝月はさっきとはまた別の意味で脱力した。

そううまく帰れるわけがないとは思っていたが、仮にも女の子の期待を裏切るのだ、もう少し他に言い方があるんじゃないだろうか。

でもまあ、永夜にそんなことを望んでもしょうがないということ
は、今までの会話で嫌と言うほどわかっていたのだが。

「どうしてできないか聞いてもいい？」

もつずつと永夜のことを質問攻めに行っている引け目から遠慮がち
に尋ねると、当の本人は何ら気にした様子もなく頷いた。

「さつきも言ったが、俺がここに居る理由は図書修正士としての役
目を果たすためだ。予定外に色々起こったのは確かだが、仕事を終
えるまで戻るわけにはいかない」

朝月は少し前に永夜がいつていたことを思い出した。彼は自分が
ここにいる目的を覚えておけと言ったのだ。それは、その目的を予
想外の事態——つまり朝月のためにあきらめる気はないということ
だ。

「トーヤと一緒にじゃなくてもいいの。あたしがいたって、どうせ仕
事の邪魔になるだけだし……だから先に戻る方法とかって……ない
か」

本心からの言葉だった。この世界に関して無知な自分が側にいた
って永夜の邪魔になるだけだ。早く現実世界に帰りたいかったという
のももちろんあるが、彼の邪魔になりたくないという気持ちも嘘で
はない。だからこそ、何か方法はないかと食いつたものの、少
し陰が差した永夜の表情を見て尻すばみに終わった。

「道というのは何度も繋げられるものではないんだ。一度道を繋げ
て本の中に入ると、戻るチャンスは一度しかない。もしそのとき取
り残されることになれば、もう二度と本の中からは出られなくなる」

チャンスは一度きり。もしその一度を使って朝月を現実世界に帰
したら、永夜は永遠にここに取り残されてしまうのだ。それに、も
し一緒に帰ることになったとしても、朝月といういらぬお荷物の子
で失敗したりしたら……。

そんな朝月の考えが全部顔に出ていたのかもしれない。黙って朝
月を見ていた永夜の表情が、ふいに緩んだ。

（え……今、笑った？）

思わず目を見張る朝月に気づいているのかいないのか、永夜はあくまでマイペースに続けた。

「大丈夫だ。お前は俺が責任を持って元の世界に帰す。ただ、さっきも言った通り今すぐにといいわけにはいかない。俺の仕事が片づくまで、待ってくれないか？」

その言葉を聞いて気づいた。どうやら永夜は朝月をこの世界に連れてきてしまったことに責任を感じているらしい。あれは全くの事故で、悪いのは飛び込んでいった朝月の方だというのに。

そんな永夜の言葉だからこそ、朝月は素直に信じることができた。真つ直ぐに永夜の目を見てうなずく。

「わかった。それと、ありがとう」

そう言つと、永夜は目を丸くした。きっと、自分がお礼を言われる理由がわからないのだろう。可愛いところもあるじゃないか。

そんなことを考えてにやついていると、永夜の真剣な声が耳朶を打った。

「ひとつ約束して欲しいことがある」

「約束？」

反射的に聞き返すと、永夜はゆつくりと頷いた。

「ここにいる間は、絶対に自分の本名を名乗らないでほしい」

そう言つた永夜の声は、今までにないほどに固い響きを持っていた。よほど重要なことなのだろう。朝月は自然と居住まいを正していた。

「名前や音だけならいい。だが漢字を含めた本名全てを明かしてはいけない。今俺たちは、本の中の登場人物としてここにいる。物語の核心に触れることがあれば、当然本の内容に書き加えられることになる。そのとき本当の名前、真名を記録されてしまうと、この世界から出られなくなってしまうんだ」

「真名……」

「ああ。真名を明かせば、その時点で完全にこの世界の住人になる」だから永夜は、朝月が名前の漢字を教えようとしたとき、あんな

に血相を変えて制止したのだ。朝月をこの世界の住人にしないために。

「わかった。誰かに名前を聞かれても朝月としか名乗らないわ」

朝月がはつきり約束したことを確認すると、永夜はおもむろに立ち上がった。

視線の先を追うと、中天にあった月がいつの間にか随分低くなっている。もうすぐ夜が明けるのかもしれない。

これから永夜は図書修正士として仕事をする。歪みを正すために、ブックコレクター実際どんなことをするのかはわからなかったが、朝月の胸には言いしれぬ高揚感があった。

自分の知らない世界に、不安がないわけではない。だが、永夜と一緒になら大丈夫。そう言い切れるほどに永夜を信賴している自分に朝月自身驚いていた。

「行くぞ」

そっけなくそう言うと、永夜は森の奥へと歩き始める。

「ちよつと待つてよ!」

急いで立ち上がり、永夜の背中を追う朝月の歩調は、口調と裏腹に樂しげに弾んでいた。

第5夜 月の銀時計

月の光以外に明かりのない森の中を二つの影がゆく。

先に歩く背の高い影、永夜の足取りには全く迷いがなく、目指すべき場所がしっかりとわかっていているようだ。

一方、少し後に行く先ほどより幾分小さな影、朝月の足取りは非常に危なっかしかった。予想以上に長かったドレスの裾と慣れないパンプスのせいである。

それでも転倒せずに済んでいるのは、永夜が歩くスピードを加減してくれているからだろう。そんなことを考えながら歩いていると、ふいに永夜が立ち止まった。考え事のせいで反応が遅れた朝月は、永夜の背に盛大にぶつかった。

「ぶっ……いったあ」

ぶつけた鼻の頭を押さえながら非難を込めた目で永夜を見ると、当の本人はまったく気にしていないのか懷から銀色の何かを取り出した。

「何それ？」

興味を引かれてのぞき込むと、永夜の手には繊細な細工の施された銀色の懷中時計が握られていた。

ふたを開けて時間を確認すると、永夜はそれを再び懷にしまう。

「大切なもののなの？」

歩き出そうとした背中に尋ねると、永夜は足を止め振り返った。

「どうしてそう思う？」

表情に変化は見られなかったが、声に少し驚きの色が混じっている。

「だってすごく丁寧に扱ってたから」

「……妙なところで鋭いな」

「妙なところで悪かったわね！」

ぼそりと呟かれた言葉に噛みつく朝月を綺麗に無視すると、永夜は再び懐中時計を取り出し、それを朝月の前に差し出した。当然触らせてくれるのだろうと思ひ手を出したのだが、永夜にそのつもりはなかったらしい。朝月の手は空を掻くことになった。

「この時計は図書修正士の証のようなものだ」

説明する気はあつたらしい。そう言うと、永夜は時計のふたを開けて文字盤を見せた。

ローマ数字の刻まれた文字盤の上で、秒針が時を刻んでいる。凝ったデザインの長針と短針は6時を少しまわった辺りを指していた。いよいよ夜明けも近いだろう。

綺麗な時計だなあ、と暢気な感想を抱いていた朝月だが、ある可能性に気づいた瞬間一気に青ざめた。

「ちよつとトーヤ！ 6時つてこのままじゃ私朝帰りつていうか行方不明になっちゃうー！」

今にも掴みかかりそうな勢いで朝月がまくし立てると、永夜は人差し指をたて口元に当てた。大声でわめくなど顔に書いてある。

「でも、このままじゃ家族に心配かけちゃう」

「いいから落ち着け。大丈夫だ、そんなことにはならない」

「……ほんと？」

縫るように尋ねると、永夜はゆっくりと頷いた。永夜の落ち着いた声に、朝月もだんだんと冷静になってくる。

朝月が落ち着いたのを見て取つて、永夜は口を開いた。

「時計は持っているか？」

「うん。確か腕時計をポケットに入れてあつたはず……」

言いながら腕時計を取り出そうとしたところで、朝月は自分がドレスを着ていることに思ひ当たった。どこかに入っていたりしないかとドレスを探っていると、右腰の辺りに堅い感触がある。もしかやと思つてドレスの生地をかき分けると、小さなポケットが口を開けており、手をつまむと腕時計とハンカチが出てきた。

普通のドレスにはポケットなんてものは存在しないはずだ。本の

中の登場人物になったと言っても、少しは融通が利くらしい。

黙って朝月の行動を見ていた永夜は、朝月が腕時計を取り出したのを見ると再び口を開いた。

「腕時計の文字盤を見てみる」

言われて、朝月が文字盤を見ると、針が10時18分を指したところで止まっていた。

「止まってる……電池切れかな」

「いや、そうじゃない。この世界では、現実世界の時計は使えない」「使えない？」

だから止まってしまったのだろうか。

「ああ。時間の流れが違うんだ」

「時間の流れが違うってどういうこと？」

朝月が混乱していることに気がついたのか、永夜はゆっくりとした口調で説明した。

「たとえば、本の中で1時間過ごすとする。その後現実世界に戻ると、1時間どころか数時間経過している場合があるんだ。もちろんその逆で、本の中で一週間過ごしても、現実世界では1時間しか経っていないこともある。今回の場合は後者だ」

そこまで言っていると、永夜は黙って朝月を見た。どうやら朝月が理解するのを待っていてくれるらしい。

新しい情報を頭の中で必死に整理しながら言う。

「後者ってことは、この世界の方が、現実世界よりも、時間の流れが早いってこと？」

自信のなさから切れ切れになってしまったが、それを聞いた永夜は満足気に頷いた。

満足気と言っても、永夜はもともと表情が乏しいため、わずかな変化から朝月が勝手に判断しただけなのだが。

「現実世界での1時間はここでの4時間に相当する」

「へえ……でもどうしてそんなことがわかるの？」

朝月の質問に、永夜は持っていた懐中時計をかかげた。

「この月の銀時計を使う」

どうやらこの時計は「月の銀時計」というものらしい。

「そう言えば、私の腕時計は止まってるのにそれは動いてるわね」

「これは現実世界では使えない。その代わり、本の中の世界では正確に時を刻むことができる」

凝った作りをしてはいても普通の懐中時計にしか見えないのに、

この時計はどうやら特別なもののようだ。

「修正作業コレクトを行うときは、まず始めに時間の流れを確かめなければならぬ。だから1度目に中に入ったときは、この時計で丁度1時間経ったら現実世界に戻って、どれだけ時間が経過しているかを確かめる」

ということは、今回も事前に本の中へ入って時差を確かめていたのだろ。もしかすると、昨日美奈穂が見たという光はそのために放たれたものかもしれない。

（あれ、でも美奈穂、どうしてそんな時間に学校にいたんだろう……）

そんな朝月の考えを、永夜の声が遮った。

「だから、まだ大丈夫だ。現実世界ではまだそんなに経ってはいない」

「よかった……」

家族に心配をかけなくても済むという安堵感からか、朝月は直前まで考えていたことを頭の隅に追いやった。

「だがタイムリミットはある」

そんな朝月の素直な喜びを、永夜はまたもや消し去った。どうして永夜はいつも朝月を喜ばせてから落ち込ませるのだろうか。

おそらく何も考えていないのだろと、朝月は勝手に結論づけた。
「俺たち図書修正士は月の力を借りて本の中に入り、現実世界へ帰る。だから月が出ている間しか力が使えないんだ」

「えっと……つまり？」

「現実世界の月が沈んでしまえば、ここから出るためには次に月が

昇るまで待たなければならぬ」

永夜は何でもないのでこのように言っただけだが、これはとても重要なことではないだろうか。朝月は再び焦りを感じていた。

「ちなみに、月が沈んじゃうまであとどれくらい？」

「4時間。この世界に換算すると16時間。つまり今夜の午前0時、日付が変わるまでに現実世界に帰らなければならない」

16時間。それが十分な時間なのかそうでないのかは、朝月にはわからない。

「それだけで、なんとかかなりそうなの？」

何気なく聞いただけだったのだが、永夜は軽く顔をしかめた。見くびられたと思ったのだろうか。

「問題ない」

「そっか。まあもし何かあったとしても、また月が昇るまで待てばなんとかなるしね！」

明るく言った朝月をしばらく見つめていた永夜は、やがてぼそりと言った。

「本が閉じられなければな」

「へ？」

間抜けな声をあげた朝月に、永夜の冷たい声突き刺さる。

「俺たちが入っている本を、もし誰かに閉じられた場合、次に誰かが頁を開くまでここからは出られない。その間にも俺たちという存在そのものが本の歪みを広げて大変なことになるだろうな」

現実世界の明日は平日だ。図書室を訪れる人も必ずいるだろう。もし誰かが開いたままの本を見つけてしまったら、きっと閉じて本棚に戻すに違いない。

「ああ、あと、その腕時計とハンカチは絶対に落とすなよ。現実世界の物も歪みの原因になる」

——なんて制約の多い世界なのだろうか。

朝月が軽く絶望していると、永夜はもう歩き出していた。

「そんなあ……」

その背を呆然と見つめていた朝月だったが、永夜の纏う空気を見てある可能性に気がついた。

（あれ、もしかして……あたしが永夜の実力を疑ったから拗ねてる？）

だからあんな言い方をしたのだろうか。もしそうだとしたら、意外に子どもっぽい。足下をすくうような発言に腹は立ったが、どれも無事に帰るためには必要な知識だ。それに、意外な一面に気づけたこと自体は悪くない。

なんだか楽しくなってきた朝月は、小走りで永夜に追いつくとその背に声をかけた。

「ね、トーヤ。あたしは信じてるよ。トーヤならちゃんと現実世界に連れて帰ってくれるって」

歩き続ける永夜から返事はなかったが、その歩調が少しだけ緩んだ気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4173m/>

月夜の扉 頁の向こう

2010年10月8日14時01分発行